共働き希望の30代独身男性における家事分担意識

柳田愛美（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

1. 背景と目的

日本における共働き世帯の家事時間は、妻が3時間16分であるのに対し、夫は15分となっており（総務省 2017）、共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回っても、家事の大半が妻側に偏っている状況である。既婚者を対象とした研究では、共働き夫婦の家事分担について、夫婦の就業形態を考慮した研究も含め、多くの知見が蓄積されてきた。

しかし、独身者が対象の研究においては、男性が女性に経済力を求めるようになってきているとの指摘がされる一方で、共働きを希望する男性が、家事を分担する意識があるのかという点に言及している研究は少ない。

そこで本研究では、正規雇用同士での共働きを希望する独身男性に焦点を当て、結婚後の家事分担に対する意識と、その背景を明らかにすることを目的とする。正規雇用同士に定めた理由は、①同じ雇用形態で働く女性との結婚を望む男性が、平等に家事を担う意識があるのかということに焦点を当てるため、②働き方によるが、正規雇用は将来管理職になる可能性もある雇用形態であるという点を考慮したためである。

2. 研究方法

2019年7月から10月にかけて、半構造化インタビューを実施した。調査対象者は、①日本人男性で30代、②正規雇用の女性との共働きを希望しており、本人も現在正規雇用である、③現在交際相手がいない、④実家暮らしで料理・掃除・洗濯のうち、どれか一つでも週1回以上行っている、または一人暮らしをしている、という全ての条件に当てはまる10名である。

3. 結果

対象者全員に共通していたのは、結婚相手よりも自身の方が高収入でなければならないというこだわりがないこと、家事を全て女性に任せたいとは考えていないことであった。ただし、家事分担への積極性には違いが見られ、平等な意識に基づいて分担する意欲のある男性ばかりでもなかった。

積極的に分担する意欲のある男性は、「妻が主に行い、夫は手伝う」という関係を否定的に捉え、できるときにできる方が行う状態を理想的だと考えている。また、主導権を相手に委ねて、その指示をもとにしてサポートする分担を理想とする男性たちもいた。積極的に分担する意欲のある男性と、サポート型の分担を理想とする男性は、相対的資源差ではなく、労働時間に基づく分担を重視し、相手の仕事の方が忙しくなったら、自身が多くの家事を負担することも考える等、自身の働き方だけでなく、相手の働き方を尊重する意識を有していた。

ただし、現在の労働時間や普段の家事遂行の具合を考慮し、結婚後の家事分担ができると考えている男性もいれば、労働時間の長さや仕事による疲労などから、普段の家事を十分に遂行できていなかったり、苦手な家事があったりする男性もおり、意識の面では平等でも、それが実現できるとは言い難い状況にある。

また、上記の男性たちとは対照的に、家事分担に消極的な男性もいた。彼らは、仕事による疲労や経験上知った家事の手間等を理由に、自身の負担を減らすことを優先的に考え、やりたくない家事を相手にやってもらうことや、相手に多くの割合を負担してもらうことを理想的としていた。そして、結婚相手の女性に対しては、キャリアを尊重する意識が低く、家事や育児の役割を優先してもらうことを期待しつつも、職場でのポジティブ・アクションには反発し、性別を問わず能力で評価すべきと考える等、矛盾を孕んだ語りが確認された。

文献

総務省統計局, 2017,『平成28年社会生活基本調査　生活時間に関する結果　結果の概要』, (2019年5月26日取得, http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf）. ほか

キーワード：独身男性、共働き、家事分担意識